

薔薇とザリガニ

—— パリングネシスと復活をめぐる十七世紀の論争 ——

岡 田 典 之

▶ キーワード

パリングネシス
トマス・ブラウン
ケネルム・ディグビー
錬金術
自然哲学

▼ 要 旨

パリングネシスとは、植物や動物を煅焼し、そこで得られた灰に何らかの化学的（錬金術的）操作を加えると、その灰から元の植物や動物の姿が現れるという現象である。もちろん科学的にはあり得ない現象だが、十七世紀においては真正の驚異現象として認められ、最後の審判時における肉体の復活と関連させられ、同時代の知識人の興味を強く引いていたのである。本稿では、主に十七世紀英国でこのパリングネシスに言及している三人の著作家を取り上げ、それぞれがパリングネシスと復活をどのように関連させているのかを考察する。また、十八世紀以降にこの現象がどのように扱われたのか、二十世紀の小説家がどのように扱っているかにも少し触れ、パリングネシスという驚異の意味がどのように変遷してきたかも示したい。

1. パラケルススの薔薇

おそらくは十六世紀の初頭から半ばにかけてのこと、晩年を迎えつつあった医師にして錬金術師、パラケルススは、弟子を授けてくれるよう神に祈っていた。その願いが聴き入れられたのか、見知らぬ男がパラケルススを訪ねてくる。袋に詰めた金貨を持参したその男は、パラケルススが真正の錬金術師であると確信するために、ある奇跡の技を見せてほしいと懇願する。男は言う、噂によれば師は薔薇を燃やし、その灰の中から再び薔薇を生じさせることができる

と。パラケルススは拒否するが、男は薔薇を暖炉の中に投げ入れる。薔薇を蘇らせるはずのカバラの呪文の一言がパラケルススの口から発せられるのを男は待つが、パラケルススは沈黙したまま、灰には何も起こらない。それどころか初老の錬金術師は、自らがペテン師であるとあっさり認めてしまう。男は立ち去り、パラケルススは再びひとりになる。

パラケルススは一人になった。ランプを消し、使い古した肘掛け椅子に腰を下ろす前に、わずかな灰を手ひらのひらにのせて、小さな声である言葉を唱えた。薔薇は蘇った。¹⁾

実在の錬金術師であるパラケルスス (Paracelsus, 1493-1541) をめぐるこのエピソードは、もちろんボルヘスの創作である。したがって、ここで重要な役割を果たしている薔薇の復活もまた (薔薇の象徴性と相俟って)、作家の想像の産物だと思われるかもしれない。しかし、植物 (薔薇に限らない) を燃やした灰から、当のその植物が復活するという現象、パリングネシスと呼ばれるこの現象は、実はフィクションなどではない。それはパラケルススが活躍した十六世紀、さらに十七世紀にかけて広く関心を集め、真正の驚異現象として扱われた。いったん灰になって完全に死んだと思われたものが目の前でその姿を取り戻すというのは、それだけでも圧倒的な驚異であっただろう。さらに、灰から元の姿が蘇るという点では、パリングネシスは最後の審判における肉体の復活との関連を強く意識させるものでもあったのである。

2. 薔薇、ザリガニ、不死鳥

英文学史上、パリングネシスに言及した著作としてよく知られているもののひとつがトマス・ブラウン (Thomas Browne, 1605-1682) の *Religio Medici* である。医師であり文人でもあったブラウンが著したこの随想集は、十七世紀の自然観や宗教観を知るうえで興味深い作品だが、その中でパリングネシスは次のように言及されている。

A plant or vegetable consumed to ashes, to a contemplative and schoole Philosopher seemes utterly destroyed, and the forme to have taken his leave for ever: But to a sensible Artist the formes are not perished, but withdrawne into their incombustible part, where they lie secure from the action of that devouring element. This is made good by experience, which can from the ashes of a plant revive the plant, and from its cinders recall it into its stalk and leaves againe.²⁾

ここで “a contemplative and schoole Philosopher” と呼ばれているのは、もっぱら書物と論理に頼るスコラ哲学者、“a sensible Artist” と呼ばれているのは実験と観察を重視する実験哲学者 (化学哲学者、医化学者、錬金術師などを含む) である。伝統的なスコラ哲学者から見れば、植物は完全に破壊されて灰と化しているのだが、実は植物の “formes” は破壊されずに灰の中にとどまっており、茎や葉まで蘇らせることができるというのである。しかしここでブラウンは具体的にどのような実験を念頭に置いているのだろうか。Robin Robbins は、「植物の灰汁を凍らせると葉状の模様が現れ、これが元の植物に関連している」という “mistaken belief” を指す

と述べ、邦訳の註もこれを踏まえたものになっている。L. C. Martin はもう少し詳しい註を付けているが、やはり灰汁を凍らせたときの現象に言及していると考えている³⁾。

これがパリングネシスの一例であるのは確かだが、灰の水溶液が凍った時に（氷の表面、またはガラスの容器の内側に）表れる模様を以って、“revive the plant” と言いうのかという疑問は残る。また、たとえフィクションであるといっても、ボルヘスの語るパラケルススの奇跡の技ともあまりにも異なっているようにも思われる。ブラウンは、何か別の実験も併せて思い浮かべているのではないだろうか。実は、パリングネシスにはもうひとつの方法があったのだが、この現象を最もよく説明してくれるのは、おそらくケネルム・ディグビー（Kenelm Digby, 1603-1665）であろう。ディグビーは、*Religio Medici* を世に知らしめた一人であり、加えて、パリングネシスについて王立協会で講義し、著作にも残しているのである⁴⁾。

Quercetanus the famous Physician of King Henry the fourth telleth us a wonderfull story of a polonian Doctor that shewed him a dozen glasses hermetically Sealed, in each of which was a different Plant.... When he offered these glasses to your first view, you saw nothing in them but a heap of Ashes in the bottom. As soon as he held some gentle heats under any of them, presently there arose out of the Ashes, the Idea of a Flower... and it would shoot up and spread abroad to the due height and just demensions of such a Flower; and had perfect Colour, Shape, Magnitude, and all other accidents, as it were really that very Flower.⁵⁾

植物の灰を入れ密封したガラスの容器を暖めると、そこに植物の姿が現れる。ただしこれは、ディグビーが慎重に「まさにその植物であるかのごとく」と述べているように、あらゆる点で本物そっくりな植物の“*Idea*”であって、厳密に同じ植物そのものが復活しているわけでは無さそうである。とはいえ、目の前で灰から植物の姿が立ち現れるという点で、灰汁を凍らせることに比べれば、より直接的に復活を目撃することができるだろう。ブラウンがパリングネシスの話題を持ち出した章を冒頭から読んでみると、凍った灰汁ではなく熱によるパリングネシスの方をより強く意識していたという印象を持たざるを得ない。

How shall the dead arise, is no question of my faith; to beleieve onely possibilities, is not faith, but meere Philosophy; many things are true in Divinity, which are neither inducible by reason, nor confirmable by sense, and many things in Philosophy confirmable by sense, yet not inducible by reason.... I beleieve that our estranged and divided ashes shall unite againe, that our separated dust after so many pilgrimages and transformations into the parts of mineralls, Plants, Animals, Elements, shall at the voyce of God returne into their primitive shapes; and joyne againe to make up their primary and predestinate formes. (*RM*, 120)

最後の審判を前にして、神の一声で復活する死者。その灰は既にさまざまな被造物の一部と化していても、元の肉体に戻る。可能なこと（possibilities）だけを信じるのは単なる哲学であ

って信仰ではないというブラウンは、神の声によるこの復活が哲学的には論証不可能であることを暗に認めているのだが、それでも灰からのパリングネシスは論証不可能であっても感覚（経験）によって確認ができ、人間でさえ行ない得る驚異として、復活への信仰を強化してくれるものであるだろう。この奇跡的光景を、例えばジョン・ダン（John Donne, 1572-1631）は次のように詩に表している。

At the round earth's imagined corners, blow
Your trumpets, angels, and arise, arise
From death, you numberless infinities
Of souls, and to your scattered bodies go,⁶⁾

もちろん復活についてブラウンがダンと同じビジョンを抱いていたという証拠はないのだが、しかし死者は審判を受けるために復活し神の前に立つという文脈で考えてみると、灰汁が凍った際の氷の中に現れる模様では、あまりにも貧弱なイメージではないだろうか。熱によってフラスコの中に現れる、ディグビーの言葉を借りれば、まさに灰の中から立ち現れる（arose out）植物の姿の方が、より強く肉体の復活を連想させてくれるという点で、ブラウンの趣旨に適うものであるように思われる⁷⁾。

とはいえ、フラスコの中で灰から薔薇が復活するといわれても、それはあくまでもガラスの向こうの話であって、熱から離せばその形は消えてしまうし、フラスコに手を入れてその薔薇に触れるわけにもいかない。そもそもこれはガラスの表面に現れた模様に過ぎないのであって、灰と化した生命の復活とはいえないのではないか。このような疑問を持つのは、なにも現代人に限らない。上記の引用部で“the Idea of a Flower”が現われると語っているディグビーは、さらに次のように述べている。

Were not this then a true *Palingenesis* of the originall Plant? I doubt it would not be so. For speaking rigorously, I cannot allow Plants to have Life. They are not *Se Moventia*, They have not a principle of motion within them. It is the operation of outward Agents upon them, that setteth on foot all the dance we have above so heedfully observed, and which so near imitateth the motions of Life. And if it be not a living thing, then it is all of it in perpetuall Flux and Change, without having any part of it enjoy a fixed and permanent *Being*.... (Digby, 80-81)

ここでディグビーは、植物のパリングネシスが単なる映像や模様ではなく、実際にその形態を取っていることは認めている。しかしそれは、自ら運動せず、外部からの熱という“Agents”によって動かされているに過ぎず、それゆえ生命を持っているとは言えないのである。では、真のパリングネシスはあるのか。ディグビーが“*reall Palingenesis*”と呼ぶもの、それはザリガニを用いたものである。

この手順をディグビーは詳しく語っているのだが、要約すれば、ザリガニを煮て煮汁を取っておき、さらにそのザリガニから水分を抽出し、残ったザリガニの肉や殻などをさらによく燻

焼して灰にする。その灰に煮汁を注ぎ、加熱して水分を飛ばしたところへ先ほどザリガニから抽出した水分を加え、湿った場所へ放置し腐敗させる。しばらくすると小さな生物が動き始めるのが観察されるようになるが、これに牛の血液などを加えて養うと元の大きさのザリガニに育つというものである。この少々グロテスクな実験を実際に行ない、しかも何度か成功したというディグビーが実際に何を目撃していたのかは疑問の残るところだが⁸⁾、しかし問題はザリガニそのものではないのである。

All this leadeth me to speak something of the Resurrection of humane bodyes. There we may find some firm and solid footing. (Digby, 85)

ディグビーにとっては、これが人間の肉体の復活について何がしかのことを示唆してくれる、つまり復活の奇跡の確固とした自然学的根拠を与えてくれることこそが重要なのである。ではなぜ復活は奇跡なのか。それは単に肉体が復活するからではなく、生前と同じ肉体が復活するとされているからである。この「同じ」ということが、復活に際しての最大の難問となる。

If a Caniball should feed upon my body, and convert it into the substance of his, can both of us rise again with the same bodyes we enjoyed here? Yes, without doubt we may. And I conceive, that the taking away of this difficulty... will be so welcome a performance.... (Digby, 86-87)

仮に自分の肉体が人食いに食われてしまってその一部となったとすれば、その人食いと自分の双方共が復活の時に生前と同じ肉体をもって復活することは可能だろうか。疑いなく出来るであろうとディグビーは述べている。この部分は、ブラウンの先の引用、人の死後変転を重ねて鉱物、植物、動物の一部にもなったその人の生前の肉体の構成要素は、神の一声で元の状態へ復帰するという一節を思い起こさせるだろう。しかしディグビーは次のようにブラウンの態度を批判しているのである。

Methinks it is but a grosse conception to thinke that every *Atome* of the present individuall matter of a body; every graine of *Ashes* of a burned *Cadaver*, scattered by the wind throughout the world, and after numerous variations changed peradventure into the body of another man; should at the sounding of the last *Trumpet* be raked together againe from all the corners of the earth, and be made up anew into the same *Body* it was before of the first man. Yet if we will be *Christians*, and rely upon Gods promises, wee must beleieve that we shall rise againe with the same *Body*, that... live here on earth....⁹⁾

ここでの“grosse”のニュアンスはdull, stupidといったところだろう。直接には、現在の肉体を構成している全ての粒子、焼かれて灰になり風に乗って散り散りになり、他の人間の肉体の一部にもなる全ての粒子が神の一声で元の肉体に戻るという考えを指して“grosse”と言ってい

るのだが、もちろんディグビーは復活の奇跡そのものを否定しようとしているのではない。キリスト教徒である限りは、同じ肉体で復活することは信じざるを得ない。つまり、ディグビーが批判しているのは、パリングネシスを例として引きつつも、可能なことだけを信じるのは哲学であって信仰ではないと言い、復活の奇跡については信仰上何の疑念もないと断言するブラウンの態度であろう。ブラウンにとっては、まず神の全能に対する信仰があり、たとえ不可能事であっても、それを信じるのが信仰である。パリングネシスは、復活の文脈で用いられてはいるが、復活を証明するものではなく、信仰の一助に過ぎない。したがって、あらゆる部分のそのままの復活は、理屈抜きに信じられるものなのである。しかしディグビーにすれば、むしろ自然哲学者は、この難問を進んで解決すべきなのであって、それによって信仰に寄与するのである。

And I conceive, that the taking away of this difficulty... will be so welcome a performance.... (Digby, 86-87)

では、ディグビー独自の復活理論とはどのようなものだろうか。それはひとことで言えば、何を以って同じと考えるのかという点に尽きる。

It must not then be on the side of Matter, that we must look for the individuation and Identification of our bodies after the Resurrection. All matter is indifferent to every Form. There is no this or that in matter.... And consequently as long as the Form remaineth the same, the thing is the same, and the matter is the same. (Digby, 92-93)

物質的な素材である Matter (質量) は、Form (形相) と結びついてはじめて個別の何かとなる。つまり、Form と結びついていない matter とは、何でもないものであって、あれこれと区別されることはなく、何にでもなりうる。言い換えれば、物質、素材は無個性な材料に過ぎないのであって、全て同じ素材であるともいえる。とするならば、何かと何かを区別する際に（あるいは同じであると判断する際に）注目すべきなのは Form であって Matter ではないことになる。この点をさらに明確にするために、ディグビーは生きて成長する人体の例を挙げている。

Much more rigorously is it true that my eyes, my ears, my whole body, now after near 60 years durance in nature, the very same, they were, when I lay a weak Embryon in my Mothers womb. The continual floud of transpiration, and the continual supply of augmentation, do nothing hinder the Identity of this body of mine, as long as the Form which maketh it to be what it is, remaineth still the same. If then the Form of Man, which is his soul, remaineth the same after its separation from the body, as it was whiles it was co-partner with the body, what difficulty is there to allow her to have the same body she had in this world, if she be built up again to a whole Man, out of the generall Magazine of matter which furnished her with a body before.... (Digby, 98-100)

人間の肉体は常に変化している。誕生以来、同じ物質から構成されている部分はひとつとして無い。にもかかわらず、同じ肉体であるといえるのは、人間の形相、つまり魂が同じであるからである。このことが生きた肉体について言えるのなら、死後の肉体の復活についても同様であろう。つまり、魂が不死で同一である限り、その魂がまとう（復活の際に与えられる）肉体は、定義上、同じ肉体なのである。この議論は、形相と質量を厳密に区分し、質量を完全に無個性な素材とみなすことで成立しているのだが、この前提を受け入れさえすれば、きわめて首尾一貫したものとなっている。ディグビーによれば“Every thing is like a River that is in a perpetuall course.” (Digby, 94) なのだが、この河は、当然、同一の河と看做され続けるのである。

しかし河の流れに言及するあたりで、議論の有効性はあやしくなる。ディグビーは、さらに理解しやすい例としてテムズ川の同一性や、容器に入った水の同一性を持ち出してくる。すなわち、テムズ川の水は常に流れ去ってはいくが、テムズ川自体は同じテムズ川であり続ける、ガラス容器にいた水は、中身を入れ換えても同じ「一杯の水」と言えるというのである。人間の魂＝形相の不死性や同一性から、肉体の同一性を証明することを認めたとしても、そしてテムズ川や容器の水の例も、formとmatterの二元論のパターンに収まるということを認めたとしても、やはりテムズ川が依然として同じテムズ川であると人が言うとき、そこに流れている水が同一のものであると思う人はいないであろうし、容器の水を海に流して、もう一度海から汲んだときに同一性を保っているのは容器であって中の水ではないことは直感的に分かってしまう。もちろん、ディグビーの主張は、それでもやはり同じと言い得るのだという点にあるのだが、分かりやすく卑近な例である分だけ、却ってこれを同じというのは詭弁ではないかという反論の余地を与えてしまうだろう。ディグビー自身も、この例が不十分なものであることは認めているのである。

In such abstracted speculations, where we must consider matter without forme (which hath no actual being) we must not expect adaequated examples in nature. (*Observations*, 30)

しかし、論争家アレグザンダー・ロス (Alexander Ross, c.1590-1654) は、ディグビーが用いた、この不用意でやや安直なアナロジーを見逃さなかった。

But Sir *Kenelme* in his subsequent discourse, to salve this *grosse conception*, as hee calls it, of collecting the dispersed ashes of the burned body, [tells us, that....]¹⁰⁾

以下、ディグビーの誤謬と判断するものを延々と列挙していく中で、ロスはディグビーのアナロジーの曖昧さを的確に衝いている。今のテムズ川が昔と同じテムズ川だと判断されるのは、水源が同じ、水路が同じ、岸が同じといった理由でのことであって、そもそも同じ水が流れているとは誰も考えない。海水を入れたガラス容器は、水が入ってようがいがまいが同じ容器だが、いったん水を捨てて汲みなおした水は、(同じ海から汲んだとしても) 元の水と同じ水ではない。したがって、ディグビー的な復活においては、同じ肉体が甦ってくるのではない。それ

は resurrection of the same body ではなく surrection とでも呼びうるもの、あるいは半復活 (halfe a resurrection) である。また聖書中の、神が「わたしたちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じかたちに変えて下さるであろう」といった一節も、私たちの体を変えるのではなく、新しい体を形成する、復活ではなく新しい肉体を引き受けることと解さなければならなくなるだろう (Medicus, 101)。ディグビー的な復活の理解は、聖書の語句を曲解することにつながるとロス主張しているのである。

ではロス自身は復活をどのように理解しているのだろうか。ロスは、ディグビーが “grosse conceit” としたブラウン的な復活の理解を断固として支持し、この考えは決して “grosse” なものではないと擁護する。これを “grosse” とするのは異教徒的でさえあるのである。

But this is no grosse conceit, if he consider the power of the Almighty, who can with as great facility re-unite these dispersed *atomes*, as he could at first create them.... The *Gentiles* objected the same unto the *Christians*, as a grosse conceit of theirs..., to whom *Tertullian* returns this answer, That it is as easie to collect the dispersed ashes of thy body, as to make them of nothing.... (Medicus, 99)

確かにロスの言うように、神が無から肉体を生み出したのなら、その灰を残らず集めることなど容易なことだろう。厳密に同一の肉体の復活を信じるという点で、ブラウンとロスの立場は似通っている。ただし、ブラウンは、可能なことだけを信じるのは哲学であって信仰ではないと言い、復活という不可能事を信じると述べていたのだが、ロスはこれをさらに押し進めて、そもそも神の行なうことに不可能はないとするのである。したがって、パリングネシスを復活の例証として用いることも不要となる。それどころか、パリングネシスのものが虚偽の現象なのである。ロスは、ブラウンのパリングネシスについての仮説を批判して次のように述べている。

... if the forme of the plant be in the ashes still, then it actuates..., & perfects the matter... in which it is, and so it is a plant still, lurking under the accidents of ashes: as in the *Masse*, *Christs* bodie under the accidents of bread. So by your Doctrine, it is no hard worke to beleieve *Transubstantiation*, or the stories of the *Phenix*. (Medicus, 56)

カトリックの教義である実体変化 (Transubstantiation) を持ち出して、これを信じるのも同然と言うのは、かなり際どい批判である。要するに、ブラウンが言うように、植物の “forme” が火によって破壊されずに灰の中に残っているというのなら、そこに「形相」と「質量」がそろっているのだから、見た目が灰であってもそこには当の植物が現にあることになる。つまり、もしパリングネシスがブラウンの理解しているような現象だとすれば、植物は復活するどころか、火にも耐えうる不滅の実体になってしまうのである。パリングネシスを植物の蘇りと理解する限り、このような不合理は避けられない。とするならば、パリングネシスを真正の復活現象として認めることはできなくなる。

So farre as I can perceive..., this forme of the plant is nothing but an Idea, or a delusion of the eye through a glasse held over a flame, wherein you may see somewhat like a plant, a cloud in stead of *Juno*: A sallet of such plants may well tantalize you, they will never fill you. (*Medicus*, 57)

要は、ロスに言わせれば、物質的現象として見られる復活などガラス容器の中の幻に過ぎないのである。

ところで、先の引用で、Transubstantiation と the stories of the Phenix が並列されていることには注意する必要がある。パリングネシスを信じるなら Transubstantiation や Phenix も信じられようというのだが、もちろんこれが反語であって、カトリックの教義たる Transubstantiation を信じたほうがまだましだという皮肉であろうというのは上で述べたとおりである。とすると、これと並列された Phenix も皮肉の一例として、つまりパリングネシスを信じるぐらいなら不死鳥を信じたほうがましだという意味で読まなければならないだろう。ところが、ロスは不死鳥の存在を信じているのである。つまり、ブラウンを批判した先の一節の中で、不死鳥に関する部分だけは、文字通り、「不死鳥を信じることは難しくない」と解されるのである。そして不死鳥に関しては、パリングネシスとはちょうど逆の事態、ブラウンがその存在を疑問視し、ロスが断固反論するという構図になっている。パリングネシスを復活のひとつの証拠とするブラウンだが、同様の例証となりうる不死鳥の存在についてはかなり懐疑的なのである。多くの著作家がその存在に触れてきたことを認めつつも、ブラウンは次のように断言する。

All which notwithstanding we cannot presume the existence of this animall, nor dare we affirme there is any Phaenix in Nature.¹¹⁾

その理由は、著作家によって描写がまちまち、実際を目撃例がない、といった証言に関するものから、その死と誕生、生息数（一羽しか存在しない）といった自然学的な問題に関わるものまで多岐にわたって整然と述べられているのだが、これにロスは猛然と反論する。証言がまちまちであるからといって、そのものが存在しないとは言えない、目撃例が無いからといって、そのものが存在しないとは言えない、等々。しかし、ロスが最もこだわっている部分は、以下によく表れている。

The testimony of so many Writers, especially of the Fathers, proving by the Phoenix the Incarnation of Christ, and his Resurrection, and withal our resuscitation in the last day; do induce me to believe there is such a bird, else their Arguments had been of small validity among the Gentiles, if they had not believed there was such a bird. What wonder is it, saith *Tertullian*, for a virgin to conceive, when the Eastern bird is generated without copulation.... Shall men utterly perish (saith he) and the birds of *Arabia* be sure of their resurrection?¹²⁾

ロスが不死鳥の存在を信じるのは、教父たちが不死鳥をもって最後の審判の日の復活の証明

の根拠としているからである。また、もし異教徒が不死鳥の存在を信じていなかったのなら、教父たちの議論は異教徒に対して説得力を持ち得なかっただろうとも主張する。しかし、議論の有効な証拠として使われることと、それが実在するかどうかとは基本的には無関係であって、不死鳥が存在すると信じることと、実際に存在することとは違う。異教徒が不死鳥の存在を信じることは、それが実在することの証明にはならない。

だが、ロスはそう考えない。ロスが語るテルトゥリアヌスの言葉、「アラビアの鳥が自らの不死を確信し、人が完全に滅してしまうということがあるか」を見ると、教父自身がこれを説得の方便としてではなく事実として語っているようにも思えてくる。とすると、もし不死鳥が存在しなければ、教父たちは愚かであって、結果として嘘をついたということになってしまう。また方便として語っていたのなら、愚かではないだろうが、やはり嘘をついていたことになる（それなりの効用があるとしても）。つまり、教父という権威が不死鳥の存在に言及した時点で、ロスにとっては、その存在を疑うことは教父たちの信憑性を損なうことにつながるのである。

不死鳥はあくまでも復活の象徴にすぎず、象徴が実在するかどうかと、象徴によって表される事項が真理であるかどうかは別問題である。不死鳥の存在を否定したからといって、肉体の復活が否定されるわけではない。おそらくこれがブラウンの立場である。先に見たように、ブラウンはパリングネシスを復活に関連づけて扱ってはいるが、それを復活の証拠とは考えていない。パリングネシスという自然の驚異現象が虚偽のものだと証明されても、肉体の復活への信仰は揺るがないであろう。これに対してロスの議論は、例証や比喩や象徴と、その実体の実在をめぐって混乱しているように見える。とはいえ、不死鳥を否定することは教父たちの信憑性を損なうことだと判断しているロスは、伝統と権威を守るといえる意思においては、十分に一貫している。パリングネシスを「幻」と切って捨て、実体変化を信じるも同然と皮肉を飛ばすロスは、それだけならブラウンよりも合理主義的に見えるだろう。ただし、その合理性を支えているのは、何としても権威を維持するという頑迷な態度なのである。

3. 十八世紀、百科全書、ボルヘス

パリングネシスに言及しているのは、もちろん上で論じた三者に限らない。そこにはイエズス会士にして当代随一のオカルト学者アタナシウス・キルヒャー (Athanasius Kircher, 1601-1680) から王立協会の創設会員である化学者ロバート・ボイル (Robert Boyle, 1627-1691) まで含まれている¹³⁾。さらに十八世紀に入っても、パリングネシスに対する関心は維持されている。世紀のごく初頭のものだが、一例としてここで、*Curiosities of Nature and Art in Husbandry and Gardening* を見てみよう¹⁴⁾。表題は、この書が驚異現象の蒐集であると同時に実用書でもあることを窺わせ、十七世紀以前の自然魔術書 (一種のレシピ集でもある)、自然の秘法本の伝統を思わせる。内容の大半は植物の各部分の解説、樹液の性質、花や果実を大きくする方法など、かなり実用的なものであるが、この書の巻末を飾るのが、パリングネシスなのである。基本的には、それまでの諸説の要約が多く、したがって、肉体の復活との関連を示唆するフレーズも見られる。いくつか引用すると

Ravish'd at this Resurrection of his Lavenders that were burnt and sprung again from

their Ashes, he call'd to mind the happy Resurrection of our Bodies.... (*Curiosities*, 329-330)

This Rose, in Dust, comes out of its Tomb to take a new Life. This is a lively Image of the Resurrection.... (*Curiosities*, 330)

しかし、あくまでもこれらは「イメージ」であって、本物の復活ではないことも筆者は強調している。

We must not expect a solid Body in this apparition: 'tis only a shadow; and if any one should rashly go about to touch this resuscitated Rose, it would fare with him as with the sacrilegious *Ixion*.... (*Curiosities*, 334)

イクシオンを持ち出すあたりはロスの一節を思わせるが、だからといってパリングネシスを否定したり、復活についての議論に進むわけではない。

実体を伴わないとされる植物のパリングネシスについては以上のようなところだが、では、動物のパリングネシスについてはどうだろうか。ここでもそれ以前の諸説の繰り返しにすぎない箇所が多いのだが、ディグビーが「真のパリングネシス」と呼んだザリガニについての扱いには、この書の特徴がよく現われている。

This is a more useful Experiment than the Regeneration of Plants in Vials. There is something solid in it. Not only the Sight, but the Taste likewise is here regal'd, and that too with Cray-fish, who have an excellent Virtue to purifie the Blood. (*Curiosities*, 350)

植物よりも“useful”で、何か“solid”なものがあるというのだが、それはフラスコの中で視覚だけを満足させる植物（薔薇）のパリングネシスとは異なり、実際に「味わう」ことができるからというのである。しかもザリガニには血液を浄化するという医学的に優れた効能まである。ディグビーはザリガニの実験から肉体の復活とは何かという議論へと向かったのだが、*Curiosities*においてはそのような宗教的連想は一切なく、パリングネシスはあたかも有用な医薬の新たな量産方法であるかのごとく扱われている。

さらに、啓蒙の時代を代表する、あの『百科全書』にも、パリングネシスは収録されている。ただし *Curiosities* と比較するとその分量は少なく、肉体の復活との関連を示唆するような記述もほとんどない。しかし別の形で、パリングネシスは死者の出現と関連づけられている。

D'ici on peut tirer cette conséquence, que les ombres des trépassés, qu'on voit souvent paroître aux cimetières, sont naturelles, étant la forme des corps enterrés en ces lieux, ou leur figure extérieure, non pas l'âme, ni des fantômes bâtis par les démons, ni des génies, comme quelque-uns ont cru. Il est certain que ces apparitions peuvent être fréquentes aux lieux où il s'est donné des batailles....¹⁵⁾

すなわち、パリングネシスによって、亡霊が悪魔の仕業や地霊といった霊的なものではなく、死者の外形が現われているだけの自然現象であると説明できるのである。たしかにこの部分は筆者のオリジナルな見解ではなく、十七世紀の自然哲学者であったガファレル（Jacques Gaffarel, 1601-1681）からの引用であり、亡霊の出現を自然学的に解説しているのはガファレルであって、『百科全書』の著者ではない。とはいえ、さほど分量の多くないパリングネシスの項目に、いくつかある関連文献中からこれを選んで記載したということ自体に、宗教的議論へと読者を導かず、あくまでも自然学的に考えようという、『百科全書』のパリングネシスに対する姿勢を窺うことができる。

また、ザリガニのパリングネシスについては、この項目の最後で、次のように述べられている。

Voilà bien des expériences; mais peut-on s'en promettre une réussite constante, ou même fréquente? C'est ce que j'ai peine à croire; je juge même que la dernière est absolument impossible.

この「絶対的に不可能」という評価は、動物のパリングネシスに関してのみ言われているのは確かだが、この項の最後に置かれることで、あたかもパリングネシスという現象そのものを全否定しているようにも見えてこないだろうか。理性と啓蒙の金字塔ともいえる『百科全書』の中にかろうじて居場所を確保したパリングネシスは、皮肉なことにそこで最後通告を宣告されてしまったかのようなのである¹⁶⁾。

最後にもう一度、少しボルヘスに触れておきたい。ボルヘスは「パラケルススの薔薇」のエピグラフとしてトマス・ド・クインシーの『著作集』十三巻を記しているが、当該の箇所には

Insolent vaunt of Paracelsus, that he would restore the original rose or violet out of the ashes settling from its combustion¹⁷⁾

とあるだけで、特にパリングネシスについて詳しく語られているわけではない（ここでのテーマはパリングネシスではなくパリンプセスト、すなわち書かれている文字を消し、別の内容を上書きした羊皮紙と人間の記憶についてである）。したがって、カバラの秘密の言葉だけによって薔薇を蘇らせるという方法は、おそらくはボルヘスの創作ということになる。ボルヘスの作中では、レトルトは灰をかぶり、炉の火は消えている。弟子志願の男は、「言葉であれレトルトであれ」方法にはこだわらないと言う。しかし、器具・容器を用いて再生させることと、言葉だけで蘇らせることとの間には、やはり決定的な違いがあるのではないだろうか。器具を用いずに、カバラの呪文（御言葉）だけで復活させるという設定は、十七世紀のパリングネシスではない。パリングネシスには、たとえ現代の科学の観点からすれば素朴、あるいは無意味なものであっても、何らかの物質的操作が伴っていたのである。ボルヘスは、あえて「化学的・自然哲学的」（さらにいえばマテリアルな）文脈からパリングネシスを切り離し、純粋な復活の夢想、あるいは奇跡へと昇華させようとしているかのようだ。

しかしここで打ち捨てられたもの、疑似科学的に見え、いかがわしさをも呼び起こす錬金術

の様々な器具類こそ、実は物質的神秘主義とも呼びうる錬金術を根底で支えていたものではなかっただろうか。Dobbsがディグビーについて論じた際に、錬金術は物質とのつながりを失って神智論へと「劣化」したと主張している¹⁸⁾。パリングネシスも、物質的側面を失えば、文学的比喩へと落ちてしまうのかもしれない。ボルヘスの描くパラケルススの薔薇は、理性と信仰との葛藤を連想させはするものの、つきつめるとこれはパラケルスス個人の問題であるように書かれている。その薔薇が（十七世紀におけるように）、全ての死者の復活、最後の審判、世界の終末といった宇宙論的な意味の連環を持つことはないであろうし、そもそもパリングネシス自体が、物質的に可能な現象だとはもはや誰も信じてはいないだろう。これを錬金術的伝統のなれの果てと言ったら、言い過ぎであろうか。他には誰もいない陋屋、老錬金術師の掌で言葉とともに復活するボルヘスの薔薇のイメージはたしかに美しいのだが。

註

- 1) 引用は、J. L. ボルヘス、鼓直訳「パラケルススの薔薇」。J. L. ボルヘス、鼓直訳『パラケルススの薔薇』（東京：国書刊行会、1990）、37頁。
- 2) Sir Thomas Browne, *Religio Medici*, part1, 48. 引用は C. A. Patrides, ed., *The Major Works* (Harmondsworth: Penguin, 1977), p.121. 以下、本文中にRMと略記し、頁数を示す。
- 3) Robin Robbins, ed., *Sir Thomas Browne: Religio Medici, Hydriotaphia, and The Garden of Cyrus* (Oxford: Oxford UP, 1972), p.51. サー・トマス・ブラウン、生田省吾・宮本正秀訳『医師の信仰・壺葬論』（東京：松柏社、1998）、121頁。L. C. Martin, ed., *Religio Medici and Other Works* (Oxford: Oxford UP, 1964), p.308.
- 4) ディグビーとパリングネシスの浅からぬ因縁については、Michael Martin, “Love’s Alchemist: Science and Resurrection in the Writing of Sir Kenelm Digby,” *Prose Studies* 32 (2010), pp.221-239, および Bruce Janacek, “Catholic Natural Philosophy: Alchemy and the Revivification of Sir Kenelm Digby,” Margaret J. Osler, ed., *Rethinking the Scientific Revolution* (Cambridge: Cambridge UP, 2000), pp.89-118を見よ。ディグビーがパリングネシスに強く引かれたのは、妻の死、そして幼い日の父の処刑の記憶が関連しているという。
- 5) Kenelm Digby, *A discourse Concerning the Vegetation of Plants* (1661, facsim. rpt. ProQuest, 2011), pp.73-74. 以下、本文中に Digby と略記し、頁数を示す。
- 6) Holy Sonnets 7, ll. 1-4. 引用は、A. J. Smith, ed., *The Complete English Poems* (Harmondsworth: Penguin, 1971), p.311.
- 7) ただし、Henry Power (1623-68) がブラウンに宛てた二通の書簡で言及されているのは、氷の中の像であるようだ。Geoffrey Keynes, ed., *The Works of Sir Thomas Browne*, vol.4 (London: Faber & Faber, 1964), pp.258-260を参照。
- 8) Betty Jo Dobbs は、ディグビーの別の著作中の同種の実験に言及している。そこではザリガニの灰を入れる容器に川の砂を敷き詰めるように指示されており、そこにザリガニかその卵が混入していたのだろうと Dobbsは推測している。Betty Jo Dobbs, “Studies in the Natural Philosophy of Sir Kenelm Digby, Part III,” *Ambix* 21 (1974), pp.27-28.
- 9) Sir Kenelm Digby, *Observations upon Religio Medici*. 引用は、*Browne’s Religio Medici and Digby’s Observations* (Oxford: Clarendon Press, 1909), p.28. 以下、本文中に *Observations* と略記し、頁数を示す。
- 10) Alexander Ross, *Medicus medicatus or The physicians religion cured, by a lenitive or gentle potion: with some Animadversions upon Sir Kenelme Digbie’s observations on Religio medici*, p.99. 引用は <http://books.google.co.jp/books?id=fDsabKmnLWsC&hl=ja&source=gbp_navlinks_s> (last visited May 21, 2012) による。以下、本文中に *Medicus* と略記し、頁数を示す。

- 11) Browne, *Pseudodoxia Epidemica*, Bk. III, Ch. XII, “Of thePhoenix.” 引用は、Robin Robbins, ed., *Sir Thomas Browne's Pseudodoxia Epidemica* vol.1 (Oxford: Oxford UP, 1981), p.202.
- 12) Alexander Ross, *Arcana Microcosmi*, Bk. II, Ch. XXI. 引用は <<http://penelope.uchicago.edu/ross/ross221.html>> (last visited May 21, 2012) による。
- 13) パリンゲネシスに触れている作家家については、Katharine Brownell Collier, *Cosmogonies of Our Fathers* (1934, rpt. Kessinger, 2010), 435-6. を参照。
- 14) Abbe de Vallemont, *Curiosities of Nature and Art in Husbandry and Gardening. Containing Several New Experiments ... with Several Copper Cuts* (1707, facsim. rpt. Gale, 2010). 以下本文中の引用は、*Curiosities*と略記し、頁数を示す。
- 15) *Encyclopédie ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*. vol. 11, pp.784-785. 引用は <http://artflx.uchicago.edu/images/encyclopedie/V11/ENC_11-784.jpeg> および <http://artflx.uchicago.edu/images/encyclopedie/V11/ENC_11-785.jpeg> (last visited May 21, 2012) による。
- 16) 十八世紀以降のパリンゲネシスについては、Allen G. Debus, “A Further Note on Palingenesis: The Account of Ebenezer Sibly in the *Illustration of Astrology* (1792),” *Isis* 64 (1973), pp.226-230, Neil Mann, “W. B. Yeats and the Vegetable Phoenix,” *Yeats Annual* 17 (2007), pp.3-35 などが参考になる。
- 17) Thomas de Quincey, “The Palimpsest of the Human Brain,” David Masson, ed., *Tales and Prose Phantasies: The Collected Writings of Thomas De Quincey* vol.13, (Edinburgh: Adam and Charles Black, 1890), p.345.
- 18) Betty Jo Dobbs, “Studies in the Natural Philosophy of Sir Kenelm Digby, Part II,” *Ambix* 20 (1973), pp.161-163.